小池辰雄著作集 第五巻 『百世の師ヒルティー』

ヒルティー『眠られぬ夜のために』

（上巻抄訳）

# 【目次】

●１月７日　●１月８日　●１月２８日　●２月４日　●２月２４日　●２月２６日　●２月２８日　●３月１日　●３月１２日　●３月１３日　●３月１５日　●３月２５日　●３月３０日　●４月１日　●４月１４日　●４月１５日　●４月１７日　●４月１８日　●４月２７日　●４月２８日　●５月１日　●５月７日　●５月１１日　●５月２１日　●５月２３日　●５月２９日　●６月１日　●６月２日　●６月３日　●６月４日　●６月１０日　●６月２０日　●７月１日　●７月７日　●７月１５日　●７月２１日　●８月８日　●８月９日　●８月１４日　　●８月２５日　●８月３１　　●９月１１日　●９月１６日　●９月２５日　●９月３０日　●１０月５日　●１０月６日　●１０月８日　●１０月９日　●１０月１６日　●１０月３１日　●１１月３日　●１１月１０日　●１１月１５日　●１１月１７日　●１１月２８日　●１２月１日　●１２月３日　●１２月５日

# ●１月７日

侮辱する者をすべて赦してやれということは、我らの主の言行により、また我らの経験によって、疑いもなく確かめられている。すなわち経験によれば、執念深いにくしみは自分の内的生命をみ、にくしみの相手方よりもむしろにくしみを抱く者に、更に多くの害を与えるものである。

けれども時には、即座に完全に赦してしまい難いことがある。ところで、「自分はまあ赦してはやれるが、決して忘れるわけにはいかない」とか、「神があなたを赦して下さるように」とか、そういった言い草を伴う生半端な偽善的な赦しは、崇高な気持の人にふさわしくないことであり、このような赦しを安らかに受け容れたまわぬ神に対して冒瀆である。

そんな場合には、少なくとも暫らく復讐を棄てて、神にこれを委ねるのがはるかに善いことである。そうすれば神は、然るべき理由のある限り、適当な時期にきっと間違いなく、しかもきわめて適確に復讐をなし遂げてくださる。人間はこの方がしのび易い。そうすると傷ついた感情も、その感情がもはや復讐の計画で養われない限り、時の経過と神の恩恵によって次第にめられるものである。

ヘブル10･30～申命32･35。詩篇37及び73。イザヤ46･11、49･23、55･11、60･14。エレミヤ11･20。

たとい思想上でも他人と争いをするな。これはしばしば実際の言い争いよりも心情をいためつけるものであり、多くの内的な不安の原因となる。ユダヤの諺にもある通り、特に「おのが愛する者たちを怒るは、頭のてっぺんに狂気の種を播くものである」。

　　審くな

悪い人はすててけ、争いもすてて措け、

君が使命でないことはすてて措け。

君は知ってるか、神ののを、

神が誰れを回心させようとするかを。

神が彼らを救おうとしないなら、

君にとって充分ではないか。

彼らはにあずかり得ない

重い鎖をしょっているのでないか。

光も淡いのさなかにあって

彼らはつねにを憂いている。

その頭上には絶えずの

剣が懸っているのを見る。

彼らをゆだねよ、義しいに。

君の道をためらわず往け。

神は凡俗なを抱く

時流作家ではない。

（１）「活ける神の御手に陥るは畏るべきかな」

# ●１月８日

「私は（今）これを忍ばねばならない、けれども至高者（いとたかきもの）の右の手は（やがて）凡てを変え得るのである詩篇第77のこれらの言を、誠実な心と全き同感をもって賛同し得る人は、自分の苦難を乗り越えて、内的平安と平静に到達しているのである。それはストア学が教えるように、単に外見超然たるのみではない。ところがこれらも実際にはめったに起るものではない。

エレミヤ10･24、15･11～13。同胞教団讃美歌172。

あなたがのぞみまたねがい求めるものが、すべて直ちに成るというわけにはいかない。あなたにも他の人にも、あらかじめ生長し強化すべきものがなお幾つかある。そして恩恵の奇蹟の場合でも、多少は自然の道に従って行われねばならない。我々が何かを具有しているということは、自己感情にとっては唯一の主要事ではない。或るものをかち得るという確信、堅い信仰は、成就された所有にほとんど劣らぬものである。

「確く信ぜよ、君がため

最善がさだめられてあることを。

君がさええにかなら、なべての苦悩から解き放たれる。が来たなら、神の救助は力強くもつん裂き臨む。君が悲嘆を恥ろうときがはからずも来るであろう。」 （同胞教団讃美歌636）

（１）〔訳者註〕これは原典詩篇77･11〔邦訳では10節〕の本書ドイツ語原文を私訳した。邦訳では「その時わたしは言う、わたしの悲しみはいと高き者の右の手が変ったことである、と」とあって意味が全くちがう。原典の学的な読み方からは邦訳の方が真に近いが、ルッター訳はそれ自体として棄て難い味もっている。

（２）〔訳者註〕ストアはキュプロス島出身のヅエーノーン（紀元前335～263）がギリシアのアテナイの中央広場の彼の講堂につけた名「ストア・ボイキレー」に由来しているが、ストア学派は実践倫理かその根幹で、認識論は感覚説であり、形而上学は自然的汎神論的一元論である。宇宙理性（理法）としてのロゴスが万有に遍在し、秩序、調和、目的の原理として働く。それは必然的宿命的であると同時に摂理でもある。人間の道徳は、宇宙理性の分身たる人間理性に基づいて行動するところに存する。即ち自然法と人間法とは相即する、合理性即合自然となす。そのような合宇宙、合自然、合理性の生活がアパテイア（Apatheia）で、一切のパトス（激情）から超脱した心境で、これを道徳の理想とした。ストア的禁欲といわれるのもこの理念によるわけである。この派の主な人物は、ギリシアではクレアンテス、クリシッポス、ローマではセネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝、などである。

# ●１月２８日

列王下5･15～19。ダニエル3･28、6･27。創世3･6､1文明国民の宗教史をイスラエル民族宗教史から全く分離することは、決して成功しないであろう。イスラエルの宗教は、我らの見解によればキリスト教においてその必然の「改革」を見たわけであるが、ユダヤ人はこれを不当な革命と見なしている。それはあたかも旧教（カトリック）の新教（プロテスタント）に対する関係に似ている。これらの歴史的対立関係が将来いかにしてさらに高き統一に融合されるものであろうかということを、読者自ら考えてみるがよい。この事が起るであろうことは確実である。何となれば、この三つの信仰告白はすべて全く同一の根源と出発点とをもっているからである。その根源と言い、出発点というところのものはすなわち「イスラエルの神」であって、唯一の「真の神」で、我々の表現を以てすれば、人間の理解力をはるかに超越した或る事実〔このような絶対界から相対界への下降的事実を啓示的事実という〕に関する唯一の完全な人間的把握というべきものなのである。「神に楯つく真似をする」ことはすこぶる容易で手軽なことである。今日これを敢てする多くの者は、権勢ある人間に対してはその半分の勇気もない。彼らは無神論を厳罰に処するような国家秩序があったとしたら、その中では沈黙してしまうであろう。しかし我らは、彼らに詳しく定義づけられた神の解釈のいかかるものにも反対する或る種の権利を保有するという相対的是認を、彼らに拒むことはできない。なんとなれば、このような神の解釈はいつも余りにも偏狭な、従って誤ったものを伴っているであろうから。神は全く確かに、かつて人間が考え出したあらゆる「神の概念」よりも無限に偉大なものである。

それ故に今日は、我々の教義学や哲学を全部押し除けてしまって、我らの子女に単純に歴史的な「イスラエルの神」と「キリストの神」とを信ずることを教える方が善いと思う。この神は、すでに古代の最も強力な諸王すらも是認することを余儀なくされた事実的出来事において自らを証明しており、今日もなお全く同様におのれを感知せしめる神なのである。

道徳的世界秩序が、昔も今も自由意志性に基づくものであり、この自由意志性あるがゆえに、悪も善も生起するにまかせて、善が全く善であるときにのみこれに勝利を保証し、時にはまた悪によって悪を滅ぼすを知り、「死者をして死者を葬らしめことができるものである。ということは、如上の神にのみわしいことであって、これは我々にはしばしば、この小さき我々人間どもの倒錯した在り方遣り方に対する崇高な皮肉のように思われる。この我々小さな人間どもは、そのはかない「哲学」や「政治」をもってこれを変え得ると思っているのであるが。詩篇2･1～4。出エジプト3･6､13～1

（１）〔訳者註〕創世3･6､16は出エジプト3･6､16の誤記と思われる。モーセに自現したヤハウェーの言で、独一の啓示神、歴史の主宰者たる神が、モーセを選びの器として召命した重要な個所で、この場合、引用個所としてふさわしいわけである。

（２）この句は実はギリシャ語原典の誤謬で、アラミ語（キリスト自身の言葉）では「死者は葬儀屋に葬らしめよ」であった。（第一巻『無者キリスト』78頁参照）

（３）〔訳者註〕「わたしは在って在る者」、「わたしは在る者」というヤハウェー（イスラエルの神）の名のりでが示されている個所で、極めて重要。この「在る者」という邦訳の原語は「ハーヤー」という語源から来る語で、一般に「存在する」の意とされている。「ヤハウェー」というイスラエルの神の名（従来の邦訳で「エホバ」と訓んでいたもの）も、同じく「ハーヤー」から由来するものと解せられる。「ハーヤー」からの派生語名詞たる「ヤハウェー」は「存在者」「実在者」で宜しいわけだが、むしろ「実存者」という訳語を以て啓示神たる性格をあらわすべきものと考える。そしてこの「実存」の意味は、「わたしは在る者」、「私は（自他を）在らしめる者」、「私は自現する者」。従来の訳「わたしは在って在る者」ではなく、「わたしは在らしめて在る者」と訳したい。それはヘブライの文法的に必ずしも無理ではない。「他を」の場合は「在らしめる」のであるから、《der ins Dasein Rufende；Schöpfer》創造者の意となり、再帰的な意味をふくめる「自を」の場合は《der sich offenbarende, eintretende, lebende Gott》生ける啓示神の意となる。そしてこの啓示神は同時に創造神であるから、この両義は実は不可離で、「ヤハウェー」は啓示、創造、実存の神の意となる。これは聖書神学的に正しく、ヘブライ語の弾力性からみても考え得られることである。

# ●２月４日

言う、世間にはどうも愛が余りにも少なく、余りにも多い。だから我らはこの憐れむべき人類を見棄て、これを軽蔑しようとおもう、と。

前提は論議の余地もなく正当であるが、結論はそうではない。だからこそ、少なくとも我々は能うかぎり、愛を増し、利己主義を減じたいとおもう。

しかしながら次のことは絶対に確実であると思う。すなわち、あなたがたが何ものにもして神を愛し、従ってまたすべての披造物をしくいつくしむ或る別な心得るのでなければ、あなたがたが宗教とか人道とか人類愛などについて語るところはすべて、むしろ空虚なである。そうなると、人間の本性の基を自然的利己主義に置いている唯物主義の方が、あなたがたが教会的にものを考えるか否かを問わず、諸君にとってもより多く真相に忠実な思想体系である。この「別な」心のみが能く利己主義に打ち勝つのであるが、これは誰れも生れつきもっているものでもなければ、また経験によれば、思索や意志のいかなる努力によっても得られるものではない。これがすなわち、人は人間知識と生活経験とをもちながら、何故に人間の外部に立つ力による解放とか「」を受けねばならぬかという理由である。この救贖は、ともかくすでに旧約聖書に幾回となく約束されているところである。

イザヤ48･10、65･17～24、66･12～14。エレミヤ24･7、31･1～14､33。エゼキエル11･19～20、36･26。

もしあなたがそれを体験したかったら、誰があなたに説明しても駄目である。だがこれは誰でも体験し得るのである。

なるほど印度の或る賢明な言はこう言っている、「無知の半分は思想の交換によって打開される。残余の半分は哲学の精進で駆逐される。その余りはすべて自己省察の光の中で消え失せる」（ヨガヴァシシュタ）。まあやってごらんなさい。だが私はあらかじめ言っておこう。この方法では、なお依然としてあなたにとって不満足の著しい残骸が残るであろう。

（１）〔訳者註〕厭世主者《Pessimist》この語の語源《pessime》（ラテン語）は「最悪」を意味し、何ごとも悪くとって、この世を徹頭徹尾邪悪なものとする悲観論者である。悪の首魁はサタンであるから、ものごとを悪くとることは自らサタンの配下に入ってゆくことになる。これと対照的な者がすなわち《Optimist》で《optime》「最善」を意味する語から来ている。ライプニッツの楽天主義は有名である。しかし、真の楽天はキリストという天国体を信受するキリスト者に臨む。またキリスト者は、キリストなくしてはおのれが罪のなわめから解放され得ぬ「最悪」の事態の者であることをも知っている。

（２）〔訳者註〕利己主義《Egoismus》は、ギリシア語の「エゴー」（「我れ」）から来た語。「自己」「主我」の意義で、要するに生れながらの人間は、利己主義者である。それが罪の罪たる所以である。被造物たる人間、その本質が神の「似すがた」と言われる人間が、神の意志を行わんとせず、自己の意志を立てんとするところに、罪がある。この自己を主張する心に対して、天意を求め天愛に従わんとする「別の心」こそ、真の天的自由を与えるものであることを著者は指摘する。

（３）〔訳者註〕「別な心」《ein anderes Herz》サムエル上第10章にサムエルの執り成しによって、サウルに「新しき心」が与えられて「新人」になったことが書いてあるが、キリストの霊が新たに臨むことによって「新生」するとき、この「別な心」が来たわけである。パウロが第一コリント15･47で「第二の人」といっているのも、この「別な心」の人のことをいう。ヨハネ第３章でイエスがニコデモに、「人新たに（上から）生れなければ」と諭されたのも同じ事態である。

# ●２月２４日

人間のあいだのと愛情とは、この関係の最良の場合ですらきわめてしばしば起るように、上品な享楽欲に堕してはならない。むしろつねに相互の内的進歩を眼中に置かなければならない。

急激な内的進歩は、強烈な震憾的事を通してのみ起る。それゆえ、そのような進歩を望むならば、このような震憾的事象に出遭うことをひどくれてはならない。

（１）〔訳者註〕その決定的なものは聖霊のバプテスマである。

# ●２月２６日

人間のあらゆる性質の中で最善のものは信実（Treue）である。信実は、ほとんどあらゆる他の性質を償うとも、それ自身は何ものによっても償われない。

この性質は、遺憾なことに、人間にはむしろ稀に、動物にはよりしばしば見られる性質である。従って人間はこの重要な点で、事実、動物に優っていないわけである。あらゆる他の事にもまして、このことがあれば、生きとし生けるものの段階的発展の可能性を私は納得し得るであろうが。

また概して言うと、高等動物よりも人間の方が恩を知ること稀である。それ故に他人の感謝を期待しないがいい。しかし自らはつねにその名誉ある例外者でありなさい。忘恩の最も普通の形は、訪問とか、その他あらゆる感謝の義務の「是認」をもってすでにその義務を果したと考えることである。君主国家において勲章授与という形でなされるが、それによって関係はかえって逆にさえなるのである。このような余りにも安価な支払を、できるだけ避けて、むしろ貸したままでいなければならない。

# ●２月２８日

いわゆる「内的な戦い」というものは、きわめてしばしば、人間の我意の、これに対立していることの瞭かに認められる神の意志への戦いのほか何ものでもない。しかも我々はその際、神を我らの意図に賛成せしめ得ると思っている。民数22、31･8､16。

　　　舟出

事は起った。私は此世を立ち出でた！

その杯は千々に砕けた。

わが小舟は岸辺を離れた。

にかそけくもがほのめく。

見渡せば路もないしき海よ。わがぐべきもの今よりは。

わが地位は君らの執るにまかせよ。

君らにはあれ、わがために開けよ。

私は敢てした、久しい課題を、悩ましきを経てったことを。わが巡礼の舟あしはに着くまじ、

のを見出でるまでは。

の枝はわがために花を咲かせない。

柏葉の環もわがを飾らない。この世かぎりのはいたずらである、

の冠を私はなお見出で得るのみ。

遥けく高きこの夢ではないか。

霧にもまがうかのは岸ではないか。よし然るとも、私は崇高いに耽るのではないか。

この荒い大海原を越える道が果してあるのか。

小暗い舟路のに荘厳の神都を見得るか。患難はいかに重くとも、私はこの路を往かざるを得ない。

汝、わが生みの故里よ、地よ、いざさらば！

は暫しだが、はである。

（１）〔訳者註〕１８３３年２月２８日はヒルティー誕生の日である。しかし彼のたましいはここに第二の誕生を詠っている。

# ●３月１日

利己主義は、宗教と一致せざること最もはなはだしいものである。それゆえに我々が、どんなものでも正当にかつ心安らかに所有しようとするならば、それをば必ず一たび（少なくとも内的に、しかも時には外的にすら）明け渡して、さて新たに神から返していただかねばならない。それほど宗教とは相反するのである。財産、栄誉、名声、健康、働く力、家庭、生の喜び、皆そうでないものはない。然り生命そのものすらこの例外ではない。もしこのようにして神から受けとるのでなかったら、すべてこれらのがかえって我らを破滅にすこととなり得るのである。これがいわゆる「試練」の意味である。それは、我々が果して自発的にこのことをなそうとしているのか、またなし得るかを試験するものなのである。創世紀第22

これらの試練はこの断固たる善意志をもって終局にまでもたらされないかぎり、その役割を未だ全く果したとは言えないのであって、神が我らに恵み深くあられるなら、試練はその役割を止め得ない。人間がついに不平を言うことをやめないものだから、神が試練を早期に終らせたり、あるいはそれどころか、その人が全くに置きっ放しにされるならば、それはまことに善くない徴候である。このような人は、神に見棄てられた人で、確かに破滅に向かっている人である。それにもかかわらず、彼らはしばしばこの世の幸福者と見做され、また時には全く自分でもそう思い込んでいるが、目ざめた時にはもう遅すぎる。

（１）〔訳者註〕信仰の胸突八丁ともいうべき記事。すなわちアブラハムが独子イサクを神に献げる劇的場面である。

　　の雪

冬去りて春も来がての時、とと光を求めて

わが心死ぬばかりなり。

すべてわが

深きに蔽われて、

とと重きの

の、われをさいなむるあり。

大地はその旧きをもて

我を深く圧倒す。

花を夢みて春をえば

新たに散るか雪の華。

さあれ、雪に埋もれて

緑の芽生頭をぐ。

主よ、が秘かなる計らいは

必ずや現われざるを得じ！今ひとたびり往け （ヨハネ黙示3･1）高嶺を去りてと深き谷底に往け、今ひとたびのを敢てせよ。

のため汝が心根をまたも鍛えよ、 の冠は未だ汝がならず。

汝がなお堅からず、汝が明らかならず。主は汝がを解くを得ず。

行いて獲るを得ざりし賜を、苦難に甘んじてこそ捉えんとせよ。

# ●３月１２日

晨より夕に至るまで、つねにただ神の意志のみを行えよ。そうすればあなたはすでに地上において、現世の目まぐるしいこと、歯車のような生活の迷路からあなたを天上の国へ導き入れるアリアードネの紐を手に持っているというものである。

神の意志が必ずしも直ちに明白でない場合にはあなたは神の意志を探し求めなければならないが、その探し求めることの中にすでに祝福があることに留意せよ。

# ●３月１３日

最も幸福な生活においても試練と憂慮とはなかなか多くあるものであるが、これを堪え難い重荷と見るか、それともおのが主義を実行し修練するために神から賜った機会と見るかは、ものの感じ方にとって大きな相違である。しかも結局すべてはこのような感じ方如何に関わるのである。

この後者の把握の仕方はただ信仰をもってのみ可能なことで、またそれは信仰のもたらす最も著しいプラスの一つである。

十字架は重い、けれども不思議だ、

それがきみを担っている、きみはそれをほとんど担わなかったのに。

は真っ暗だ。けれどもに

真昼が待っている。──そこへ到る路の名は「断行」

我らの力なりとはいえ、きみの托身している

主の力は偉大である。きみの星は闇の夜に輝ようている、

「今日」に死んだね──「」はだよ。

# ●３月１５日

イザヤ30･15、1

主は、あなたのためにを施し得る日を待っている。だからあなたは決して心配したり、将来の計画を立てたりして、そんなことで大事な大事な仕事の時間を沢山無駄に費してはならない。神を信じて、神の道を歩こうと率直に励むならば、万事はひとりでに、しかもあなたが自分で考えるよりははるかにうまく行く。かくして生活は非常に楽になってくる。というのは、来るかも知れないと思って不幸を心配することは、実際に現在していてそれを耐えなければならない不幸よりもはるかに多く人間の力を消耗させるからである。不幸はしばしば外的な手段や努力で打ち克つことができるが、心配は神に対する力強い信頼によらなければ根本的にこれに勝つことは出来ない。この経験は誰でもなし得るところである。

ところが、全く敬虔な人々の中にもまた、その誠実な篤信にも拘らずなお多くの絶え間ない思いわずらいの中に生活し、えきわめて多くの事柄においてやはり世間並の道を歩んで、特に地上の財宝の評価に関して世間と見解を同じうしている人達がある。この最後の点は別としても、きわめて敬虔な心ばせをもちながら、そういったの富裕な身分の高いキリスト者が今日非常に沢山いる。これらの人々のもとに、神がともかく暫く待つのは、たしかに明かな恩恵のしるしといわねばなるまい。なんとなれば、人は神ととに同時に依り頼むことはできないからである。かか、どちらかが心の中で席を譲らねばならない。そこにはいかなる「和解」の道もない。

　あなたがたのなやみをすべて主に投げかけよ。

　　主は、あなたがたのために心を用う。

がのための思いわずらいを、

キリストにゆだねまつれ。

がなし得るはただ思い計らいのみ。主は往く道、行く末を瞭かに知り給う。

主はをば好み給わざれど、が捧ぐる祈りを喜び聴き給う。汝一策を案ずるのみなるに、主は千策を計り給う。

かくて誰れも勝手気ままにを害うなからんために、キリストは人の心をときて汝にを賜うなり。

苦しみも喜びも彼のより

安んじて享け、断じて気を落とさざれ。

主は速やかに汝がを変え能う。

そを嘆きなば、汝がはいよいよ悪し。

のに来たりしは、なく

をくるしむるためにはあらず。

ただ信ぜよ、まことのいのちの植えらるるは、悲しみの日にこそ、と。

（１）「主エホバ、イスラエルの聖者かく言いたまえり、『汝ら立ち帰りて静かにせば救をえ、平静（おだやか）にして依り頼まば力を得べし』と」（イザヤ30･15）有名な聖句でルター特愛の句の一つであった。

# ●３月２５日

　いつわりの平安とまことの平安

　　　　　　　　　（タウレル、説教第126）

主よ、が民がの深みに抱くは、

のに似たりとも、られし水はに満つ

人の世の旅路は、

休らうためのものにあらず。ここに休らいを求むるも甲斐なし、

憩うものは滅びん。

人生は、その始めよりおごそかなれ、たわむれごとのもなし。

ただ一つあるは、大なるの確かさのみぞ。

主よ、わがを、聴きたまわば、もはや我が平安をうまじ。我が眼は、もはやにまざらん、与えたまえ、勇者の力を。

ここ、のただ中にして難き仕事の戦いをせん。

天上のの幕屋にて、我れ、の棕櫚をさん。

# ●３月３０日

巨人クリストフォルの如く、断固としてただこの世の最大の主にのみ仕えねばならない。さてその最大の主とは今日、物質的進歩と享楽であるか、学問であるか、芸術であるか、あるいは祖国とその代表者（国民または統治者）であるか、あるいは人道であるか、教会であるか、それとも神とキリストであるか。

これについては自ら決定せよしかる後に、正しくかつたましいを尽してこれに仕えよ。

（１）〔訳者註〕第三世紀の伝説的巨人で、「キリストを担う者」の意。生れたのはシリヤ、或る隠者に導かれて改心し、神の愛を体現せんとて、橋なき川の渡守となった。或る日のこと、一人の幼児を背にして川をり始めたところが、川の真中にさしかかるや、その小児の重さかかに増して、さしも強力な彼が一歩も進めなくなった。その小児こそキリストの顕現であった。その場で彼は洗礼を受けた。それは彼の平生の愛の労苦に対するキリストの応顕であったと同時に、彼が殉教の死を遂げる予告でもあったと思われる。彼は手に持っていた杖をその地中に植えるように告示された。翌朝その杖は棕櫚の樹となっていた。彼はカトリック教会では、渡守や航海者の、また急の災厄の守護聖者として憶えられている。

# ●４月１日

偉大な思想は、大きな苦しみに深くを掘られた心のからのみ生ずる。このことがて一度も起こらなかった処には、或る種の浅薄さと凡庸さとが残る。それはいくら竹馬に乗って背伸びをして見ても無駄である。その竹馬が、宗教的なものでも、科学的なものでも、あるいは哲学的なものでも、あるいはまた人間的な方途や性情でも、無駄である。けれども、誰か余儀なくされることなくして、みのりは豊かだがおそれにみちたこの道に、自ら踏み込む勇気があろうか！　また誰か神の聖手の導きなくして、しばしば道に接して間一髪なる深淵のほとりを辿りゆくであろうか！

　　大いなる深淵より

いざ来れ、海のとがき死灰よ、今しまことにれは立つの門べに。旧き人横たわるなりのに。

新しき人つく、れしばかりに。

人聞きも、うたてしき地へ道は往きけり、

あらゆるのなるおぞましき地へ。えり、我ら今まで深淵のほとりを、

闇の夜に言い知れぬ想いを抱きて。

決断の降れるを今我れ覚えたり。

妄想の域へこの道は導くなれば。

には、はやうつし世の背き去るあり、

我れを得ぬの冠に替えて。

ひたぶるに嘆く心に救をして、わが救主！　れにこそこの身をゆだぬ。もも共に汝れがものなり。死を賜え、主よ！　いざ汝れのに生きん！

# ●４月１４日

「かくせざるを得ずという人のみが偉業を成し遂げる。」これは何たる真理であろう！　それゆえ我々はしばしばこの「かくせざるを得ず」という境地にわが身を置かなければならない。従って、或る偉大な決意について予め熟慮し、そして、いよいよそのことをなすべき当意と、またなさればならぬ必然が瞭らかになったら、断固としてそれをなさねばならない。なんとなれば、人間の生涯の最大の瞬間には、つねにある種の悔恨の念かあるいは平常の自然性への復帰が伴うものであるから。これは一つの反動で、やがて堤防のような牢固たる事実に突き当って破れざるを得ない。このようにしてはじめて勝利が得られたというべく、それはこのように決意し行動してこそ容易に達せられるわけである。

# ●４月１５日

今日は誰ももはや他に仕えることを望まない。まず第一に神から、次にはいずれの倫理的世界秩序からも、いずれの国家秩序からも、いずれの教会からも、いずれの家庭的な絆からも、自由でありたいとのぞんでいる。しかし彼がそのことをある程度達成すると、そのときは空虚の感情に、あるいは野卑な享楽欲に、あるいは陰鬱な厭世主義に陥り、この最後のものは破壊欲にまで亢進することがあり得るのであ

彼はこれとは反対に、自分自身から、彼の情緒と性向から自由になることから始めるべきである。しかるのち自ら進んで神と地上における神の大なる事業に仕えるべきである。これが幸福に到る道である。

人生の学校における最上級は、今やもはや自己の改善に意をもちいることなく己を全く他人の福祉のために捧げよとの天命を受けたときに、達せられたというものであ我々が想像するところの来世の生活では、おそらく絶えずそのような在り方であろう。

（１）〔訳者註〕二十世紀の始めにヒルティーが感じていたこの精神状況は、今日民主主義をお題目としているわが国においてもっと一般的な事実となっている。民主主義は身勝手主義の如くである。

（２）〔訳者註〕ヒルティーと同国の大教育家ペスタロッチも「ただひとのためにのみ。自分のためには何ごとも念わない」ということを生活のモットーとして実践した。

　　完成 　　（ロマ6･22。ヨハネ7･38。ダンテ煉獄篇第28及び29歌）

踏破されたり、汝、辛くして険しかりし路よ。

汝、月を経、年を重ねし不安の旅路よ。

キリストの血によるを、此の身親しく我れけざりせば、にを返せしならん！

然り、血に報ゆるに血！　地獄は所詮免れず、はおのがを易く放たず、

は大にして資力及ばず！かくては誰か自由をかち得ん。

自由を得んとせば、自由に死せよ。

汝、身をゆだねて神の僕たれ。これがは此処にては日々の、

にしてのにのぞ。

かくて汝は自由なり、されどただ一つの、愛のの強く汝を縛るあり。かつて想いもよらぬ道なれど、さりながら──

人生のさちとめあてを汝れは見出でぬ！

はややに登りゆく、くあきらかに、もも歩みを止め得ず、険しき路も深き淵も危きをかし得ず、もをまし得じな。

陽はとさし昇り、そのの光もて汝を照らす。主よ、救主よ、汝にこそ感謝を捧ぐ。汝わがために血を敢てぎ給いし。

汝貫けり──この心ことごとくがものぞ！我も進みてこのをぞ汝れに捧げぬ。汝のをひき受け給いて、我をして

ただが中にうつし世をわがまで生かしめよ。

真理と力に燃ゆるこの空しき器にそそぎ入れかし。

のその仕事場にし給うものをあまねくの上に溢れしめたまえ！

# ●４月１７日

人間の身体が、善なるもの真なるものを健康に有益なるものと感じ、悪や不誠実や不純を、これらがどれほど快き形態においてであるにせよ、これらを鬱屈また不健全なものと感ずるに至ってはじめて、その人は彼があるべき、また最善の場合には、あり得る人間となったのである。それまでは最善の原理によるにもかかわらず、なお悪の影響下に立っている。キリストはヨハネ6･53～の言でこのことを意味されたのであるが、これはユダヤ人からは逆理矛盾の教説として受けとられたのである。しかもこれがまたドイツ神秘主義者達の捕捉し難いあの箴言のしかも首肯さるべき意味である、曰く、「具体はあらゆるもののである」。

（１）「まことにまことに汝らに告ぐ、人の子（キリスト）の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ。われ終の日にこれを甦らすべし、それわが肉はまことの食物、わが血は真の飲物なり。わが肉をくらい、わが血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。」

〔訳者註〕聖霊のバプテスマによって新生した霊は霊体を衣せられるからである。肉体が霊体として甦ったのがキリストの復活体である。

# ●４月１８日

かつて哲学とか神学とか呼ばれていたすべてのものが、真理性が半分しかない言葉たるにすぎないまことに貧弱なものとしか思えないことがしばしばである。それらの言葉は、その表現しようとする事柄の本来の根底に、到底達することが出来ないのである。

ところが、このあらゆる人間の知のの空に、経験の事実が輝いている。これは自分自身の生活から出て、しかも現実的にしてあらゆる神学哲学の記述の試みを超越する偉大な神についてもつ経験で、それは永遠にして動かすべからざる、しかもあらゆる人間の解明を越えた崇高な真理の星辰の如く燦然と輝いている。

ただかかる経験の事実からのみ、確固たる信仰が生れる。しかもこれは深い神秘主義であって、これを自ら体していないどんな人によっても正しく理解されないものである。他の人々にはこれは一つの「愚」であるが我々にとっては神の力である。

# ●４月２７日

もはや快楽を求めない事がなんたる人生の快楽であるか、という事を自ら試めすことなしに人々が信じ得たならば、彼らは皆例外なく、この流儀に改変し、世の中は一遍で改まってしまおう。

人生の大きな危機に際して、我々は常にまず敢行しなければならない。そうするとそれが可能となり、終にはそれが正当であったという見解が生ずる。

　　新しき

船路果てたり、我れあえて

小暗き潮を渡り来ぬ。霊どもの船、我をよく

新しき国に　運び来ぬ。

珍らしき国　別の星、

地の楽園と　名づけんか。いと近くして　いと遠く、これを知る者　なかり。遥かに　残されし

きの　よ。

我れを棄つるを　「」といい、「に生くるを」　生という。

心よ、これが　ならば、

汝は敢て　欲するや。

の絆を　棄て去りて、

自由の大気に　耐え得るや。

此の大地より　たじろぐな、

此処こその　の地。光となりし　聖徒らの

足跡るく　見ゆるかな。

つねに新たに　自己に勝ち、

歓び躍れ　ごとに。

苦しきは　はやきぬ、

は消え果て　光ぬ！

# ●４月２８日

実践的にいえば、人生の重大事は、つねに自己の義務を遂行し、これに反対するいかなる心の傾向にも異議にも多く心をもちいまいと一たび決定的に断固と決意することである。しかるのちさらに、このことを成し得るためには、神を信じ、神と絶えず結びついておらねばならぬという確信が生じてきたならば、事は成り、心はとなったのであり、直道はそこに開かれてある。しかし、義務の遂行と神との結合のこの二事が現実とならぬかぎり、宗教と道徳につき、いかに夥しい論議を云々したところで、それはほとんど全く空しい騒音にすぎない。

# ●５月１日

神は彼の子らのために試錬の炉を決してすぎるようにはしない。それとは全く反対に彼はいつもきめられたものより幾らか軽減する。人間もまた、彼らがなすべき以上に毛ほども越えて神の子らを害することを許されない。

私は私の生涯のあらゆる困難な時期において、その時期は本来更に幾分長びき、あるいは辛くあり得たであろうしまたあるはずであったという確かな感情を抱いたということを自ら証言することができる。それ故に「さあ、元気よく跳び込め、余り深くはないだろう」といえるのである。

サムエル下24･。歴代16･21～22。サムエル下16･11～12。

（１）「天の使その手をエルサレムに伸べてこれを滅さんとしたりしが、エホバこの害悪を悔いて民を滅ぼす天使にいいたまいけるは、足れり、今汝の手をとどめよ、と」

　　五月一日

はじめの曇り空、憂うるなかれ、わがよ。天に向いてはむ。か弱き殻は震うとも。

善ければすべて善し、

いつか必ず死は来たる。

労を惜しまば、す。

いざわが心、世を棄てよ。

誠にいつかに、汝、えん神の陽に。

道はいかほど遠くとも、

みてぞ往き着かん。

既に半ばをうち越えて、この巡礼の径を経し。されど未だに受けざるは、このの酬いなり。

汝をげなば、

のを見るを得ん。

汝れを迎えん聖徒らののをも見るを得ん。

きもなく旅を往け、汝れがを確くれ。旅をつづけよ午さがり、平和は招く黄昏に。

# ●５月７日

人間の内的発展もまたもちろん全く段階的なものであって、特殊な天才的素質の人間を除いては、著しく急激な進歩をなすものではない。我らはむしろ自己自身に対して忍耐をもつことを学ばねばならない。確かな高所はいかなる時に達せられたというものであろうか。それはすなわち、自分自身のことを考えたり、すべてのことを知らぬ間に自分の福祉や愉楽の目安に従って判断したりしていることを、全く自然になんらの努力なく放棄することができ、むしろ自己をある偉大なる理念のとしてのみ観るに至った時である。このような人間を聖書は「神の僕」と呼んでいる。

イザヤ49･1～6、50･4～9。

# ●５月１１日

すでにボエティは彼の有名な論文『哲学の慰め』（526年）において、人間は神の生活に参与することによってのみ真に幸福になり得るということを詳論しているが、以来ほとんど千五百年を経て、なお誰れにとっても、このことに変りはなかった。

このことに際して特に称美すべきは、神が人間のように欺かれないということである。それ故に彼にいくら形式的にだけ接近してみても、曇れる心に太陽の光を呪い入れることはできない。またいかなる宗教的熱狂や感覚的刺激も、この目的を達することは出来ない。神の身近かに在るということは、これらとははるかに事情のかけ離れた、むしろ全く独特な平静にして平安に満ちた感情である。

出エジプト34･6。列王上19･12。

それでいて、この神の身近かに在るという実感は、あらゆる人間的感情の中で最も強烈なるもので、しかも他をはるかに凌駕している感情なのである。神の共在のこの実感が、心の完全な満足に対してのみならず、またさまざまな抑圧からの精神の高揚と解放とに対して及ぼす作用たるや、友情も恋愛も、その他いかなる感情も到底比較にならないのである。しばしば引用される聖アウグスティヌスは、それが全く真実であるには、この点でなお重要な補足を必要とするであろう。

このような力をもった感情が、ある実在的対象から出てくるに相違ないということは、これを自ら知っている人々にとっては、別になんら証明を要しない。彼らはただそれを知らなかった過去の日を残念に想うのみである。

（１）〔訳者註〕ボエティウス（Anicius Maulius Cervinus Boethius, 480頃～525）ローマの哲学者で政治家。アルピヌス反逆事件に嫌疑をうけて刑死した。その獄中の手記が即ち『哲学の慰め』（de Consolatione）である。ダンテはこれを愛読した。畠中尚志訳（岩波文庫版）がある。

（２）〔訳者註〕アウグスティヌスの「告白」巻頭の言「あなたは人間を、彼が喜びをもってあなたを讃える如くり給うた。なんとなればあなたは我々をあなたのとなすべくり給うからである。我々の心は、あなたに安らうまではを得ない」を著者は念頭においているのであろう。

# ●５月２１日

真の聖は、神の意志をつねに喜び、楽々と、──然り、さながら自明の如くに行い、かつ堪え忍ぶことである。その他のいかなる聖も本物ではない。

信仰というものにとって悪いこと（あるいはおそらく善いこと？）は、最も強烈な信仰体験はこれを決して語り得ないこと、あるいはこれを語るも、他人にとってはつまらぬもの、あるいは信じ難きものと思われることである。

# ●５月２３日

愛は他のすべてのものにもまして、人を賢明にする。愛のみがよく、人間や事物の本質に対し、また彼らを助ける最も正しい道と方法に対する正しい透徹した洞察を与える。

それ故におおかたの場合、何が最も賢明であるかを問う代りに、何がこのこと、またはかのことにおいて最も愛の深い仕方であるかを問うのがよい。なんとなればこの仕方の方が、かの問い方よりもはるかに知られ易いからである。何が愛の深い仕方であるかについては、最も才能の乏しい者でも、自ら欺かれまいとするかぎり、さほどたやすく自己欺瞞に陥ることはない。ところが、きわめて才能豊かな人ですら、単に賢さをもってしては、あらゆる将来の出来事を正しく予見し、かつ判晰することは出来ない。

# ●５月２９日

祈りと思索とは決して対立するものではない。それどころか、両者は共に真理の完全なる把握のために必要である。自ら探究するにも、また神の啓示にあずかるためにも、他方なくして一方のみでは、両者ある場合のように完全には作用し得ない。

今日もなお神は彼の真の子らには誰にでも、その生涯の決定的な瞬間に、全イスラエルの子らにレビ18･2～5において告知したことを告げたもうのである。

いま暫く我慢せよ。

もう心を痛めるな。

素晴しい夏の歓喜が

春のあらしのあとに来る。

# ●６月１日

神の先見千慮ある徐々たる導きは、このようなことを自ら体験しないかぎりは、誰れも信じ得ない最も不可思議な経験の一つである。それはつねに苦痛と憂慮とを通して行われる。人間はおのがもつ一切のものを犠牲に供する覚悟を絶えずしていなければならない。特に、これのみはわがと呼んでいるところのおのが意志をこそ、つねに神に全くまかせ切る心構えであらねばならなそうすると、突然、また新たな段階が開ける。そしてこの段階に来てみると先に起こったことが瞭らかになり、幸いにもよき路を選んだこと、今や新たな自由で豊かにされていること──しかも永遠に与えられていること──が特にはっきりしてくる。

なんとなれば神の導きの道では、一たび過ぎ去ったことは再び立ちもどらないからである。これが人間的自己改善をしようとする自己選択の道と大いに異なる点である。このような自己改善の道はおおむね無効な羽ばたきと世間一般のつきなみな考え方への疲れたあと戻りとなるにすぎない。

（１）〔訳者註〕これは全く本当である。これを完璧に体現したのがキリストである。「汝の意志を成らせ給え」と提身しておのが意志を神に明けわたして彼は歩いた。すると驚くべきことがどしどし彼を通して現われた。

　　喜べ

わが心、おまえが捕われていた

そのから、起きあがれ。おまえの上にかぶさっていたのはみんな過ぎた。

今日は世界がすっかり奇麗だ、まるで新たに生れたように。おまえはこの緑の丘でもう大部重荷を解いた。

どの小草にも露がきらめく

きらきらした朝日を浴びて、

澄み切ったにはユングフラウのの冠がひかる。

どの枝にも小鳥がたのしげに

多彩な翼を揺るがせている、

最後の鴉が山へ飛び去った、

その黒い影は還って来ない。

# ●６月２日

我らの生活に影響を及ぼす超感覚的諸力の存在についてのきわめて確かな信念を私に与えてくれたものは、私の生涯における著しかった出来事がつねに私の意志なしに、然りまことにしばしば私の意志に反して起こったという経験であ

（１）〔訳者註〕イザヤ55･8～11参照。

# ●６月３日

真に神を信ずる人々は、実際異なった種類の人間であって、世間にあって見知らぬような奇異な感を覚えることが往々にしてあるものである。なんとなれば、この真の信仰は、まことにキリストがすでに言っているように、普通の信仰とはいささか異なったもので、ただに山を移すばかりでなく、さらに難事たる人間の心をも思想をも変転させるものだからである。この信仰は神を愛する魂への神の積極的な近づきなくしては、成り立たない。この神の側からの近づきは、これに比ぶべき何ものもない奇蹟であって、この奇蹟に較べては、この奇蹟から生ずるところのあらゆる異常な作用も霊的な力も自明のこと、ほとんど自然のこととしか思われない。この事実がその昔実際行われたからには、このすべては今日もまた可能であらねばならない。そしてこの救いをこそ我々は今待ち望んでいるのである。

創世49･18。マタイ21･21～22。

# ●６月４日

ヨハネ黙示（3･20）にいう如く、我々が、扉を叩き給う坤の霊に対して心の門を聞くのであって、神が我々の願いに応じてさらに善き存在への門を開くのではないというのは、人間の意志の自由に関する偉大な見解である。それ故、もし我々がそれをしないならば、それだけまた我々の責任は大である。なんとなれば、かかる次第であれば、世にはなし得ぬということはなく、ただ欲せぬということ、即ち目前現在しているすぐさま得られる救いを拒むことがあるのみであるからである。

（１）「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もしわが声を聴きて戸を開かば、我れその内に入りて彼と共に食し、彼も我と共に食せん」

〔訳者註〕これはキリストの本願の角度で、御馳走は要するに聖霊自身である。これに対して山上の垂訓の「門を叩け、さらば開かれん」はキリスト者の悲願で、キリストの本願あればこそ、この悲願は成就するのである。

# ●６月１０日

ブルムハルトその他の歴史的に確認されている奇蹟を行う人の「力」を構成するものは、おそらく単に私欲なき愛であった。この形容詞を付加しなければならないのは遺憾であるが、必要なのである。このことは、彼自身において動揺があったこととこの力が時折減退したことを意味するものであって、それはこのような異常な人間の模倣をする無数の人々においてはなおさらのことである。なんとなればこの愛は、（これと分つべくもなく連関する）信仰と同様に、福音における大きな真珠であって、これを得るためにはあらゆる他のものを棄てねばならない。そしてこの愛は間断なく試練を受けかつ使用され、どんな瞬間にも現在しているのでなければならない。またこの愛は、火と同じく、絶えず盛んになったり衰えたりする。それ故、つねに一定の水準に保たれるわけにゆかない。のみならず、これは欺かれ得ない。ひとは自分をも他人をも、つまりは信仰ありと思いこませたり説きおとすことは出来ようが、愛はそうはいかない。ここでは真実のみしか考えられない。あらゆる見せかけが試練の日を身近かに体験しなければならない。そのときにまことに怖るべくも報いを受ける。人間性のこの聖所が偽造されるならば、それは罰せられずしては措かないのである。

信仰の鍵はもともと愛である。神やキリストに対して反感のただ僅かばかりの痕跡でもなお心にとどまっている間は、信仰は困難である。のちほどこの痕跡が一たび全く消え去ったならば、信仰は楽になる。神学はこれを超克する助けとならない。本当の信仰に到達する唯一の道はこの反感の除去にある。誰かが自分は信ずることができないと主張するなら、それは大抵の場合正しい。しかしその人は、ひとからじかに非難を蒙るに価するこの原因をもっているわけである。

　　聖霊降臨祭の前夜

　　　　　　（サムエル下5･24）

「いまや君ら浄くあれ。」なおもひと日の耐え忍び。

わが昔ながらの信頼よ、いま一たびを耐え忍べ。

すでに動いた、神の恵みは

川と溢れておまえの上に注ぎくる。おおわが心、気落ちすな！　あと数分だ。桑ののにざわめきをわたしは聞く。

主よ、を宣べたまえ「起きよ、光あれ」と。

その時しも朝が来て、夢はみな終りを告げる。

# ●６月２０日

内的生活は、鉄を鍛える場合と酷似している。内的人間は絶えず繰り返し、繰り返し、火に投ぜられ、そのつど強い急激な鎚打で鍛えられねばならない。かくして彼は次第に神の欲する形相をとり、神の目的に用いられ得るものと成る。

なお似ておりかつ同時に非常に慰められることは、このような火熱の中で鍛えられたものは、いつまでも堅剛でしかも同時に柔軟なことである。これに反して、自己の計画と精励努力をいくらやってもそれではどこか堅実ならぬものがまつわるものである。

神は神の霊をはたらかせたいと願う人々にのみ与え給うのであって、この霊をただ所有し、享受せんがためには与え給わない。

　　聖霊降臨節の歓

に充てる、聖きみよ。

れをよく捉え、保つは誰れぞ。

ああ、世に酔えるに汝がの如何に乏しき！

汝れ如何にかくも深くは隠されてある、

汝れを知るはいともなる人のみぞ。

汝れはたましいの故里よりの

春の晨よ。

# ●７月１日

貫　この短言は、内的生活の危機にあたっていくたびとなく、ほとんど魔術的な効力を発揮するものである。

この語はまだ無力になり果てていない理性に、断念してはならぬことを、あるいはしばしば全く肉体的にすぎない気分に屈服してはならぬことを示してくれる。また同時に、残存している一片の善意志に衝撃を与え、無性格な厭世主義や肉体的あるいは精神的印象への卑怯な屈従に対して反抗させる。

いわば一つの急突が起る。崇高な魂は再び自由になり、真なるもの、正しきことに立ちむかう。このような瞬間はしばしば全生涯にとって決定的である。それ故、あなたがそのようなものに縛られていると感じたなら、貫け！　同胞教団讃美歌393、676、698。

（１）〔訳者註〕アイヒェンドルフ（1788～1857年）の「貫く！」という詩を紹介しよう。

　　　　　貫く！

　　　一羽、弓なすに坐し居たり。

　　　みはるかすわだつみを越えの呼べば、

　　　すでにして大空高く舞いて昇れり。

　　　岩が根のその巣速くも見えわかず、

　　　せばくるめくばかりの下界なり、

　　　として霞むは森か、か海べか。

　　　大空にはあるとも、

　　　この鷲はいや高くりてやまず。

# ●７月７日

ともかくいっこう知られていないイギリスの聖女、ノルウィッチのジュリアン（1342年生）がすでに語っているように、正しい祈りというものは元来自分自身の聴き入れであなんとなれば祈りは神が恩恵と愛とから我らに贈って下さるものであるから。「神は我ら自身を自覚して、我らが神のに適うことを祈るようになさる。しかも神は、この祈りと我らが神から贈られた善意志とのゆえにかぎりなく我らに報いようとなさる。」　我らがかかる消息の域に達したあかつきには、我らの宗教教育は完成されたのである。

ヨハネ15･7、16･24。イザヤ65･24。

（１）〔訳者註〕このジュリアンの言は、誤解のおそれがあると思うから、はきちがえない様にしていただきたい。全我を神に投げかけて、神と我とが一つになる関係、内在にして共在の境地、そういう関係をあらしめんとするとき、祈りもこれと同質のものである。その祈りは全我のいつわりなき告白であると同時に、その告白における全内容は投げ出されて、自らはからっぽである。充満は空無である。その空無に同時に、神の意が充満してくる、それがまた自分の祈りとされる。かかる緊張関係、矛盾関係の中に、真の祈りの火花が散る。それを「自分自身の聴き入れ」といったのであろうが、実はやはり、神自らの聴き入れである。なんとなれは神の「吹き込み」がわが真空管の中で返えすからである。「われもなく世もなくただ主のみいませり」という心境である。祈りにおいて、神とキリストと聖霊の三一の神は、それこそ神秘的な交りをもって我らに現実に迫り、抱き、支え、力づけ下さる。正直に、率直に、大胆に、祈るべし。祈りはつねに裸なるべし。梵鐘の如く、腹に天空を宿してこそ天韻は発する。すなわち鳴るは天か鐘か、天鐘一如の相である。旧讃美歌529「あなうれし、わが身も」参照。

# ●７月１５日

信仰の本領は、神への努力にあるのではなく、神への帰依（帰人、祈入、南無）にある。我々が神の扉を叩くのではなく、神が我らの扉を叩くので、我々は神に対して扉を開かねばならない。

そうすれば、一切が階段的に全くひとりでにつづいて来る。まず緑の野、次にみのりを約束する穂、次に熟した善い穀物、最後に、善く暮した虚しくなかった生活のあとに、安息のための刈入れ。イザヤ45･2～5。ヨハネ黙示3･20。ルカ12･36。

「神を愛する者には、すべてのこと善く役立たざるを得な（ロマ8･28参照）。真にこの真理を信ずる者にとっては、普通の意味においての「幸」「不幸」の概念は、すでに存在しない。その人はもはや、「快楽への渇望と、苦難に対する恐怖とによってまされるような人々」の仲間ではない。ゼパニヤ3･14～20。

（１）〔訳者註〕ロマ8･28の現行訳はこれとちがい、ギリシア語原典には現行訳が忠哭である。

# ●７月２１日

他人に与えることを学ぶのは、多くの大事と同様に、ただくりかえし実践することによってである。これを学び得れば、それはまた人生最大の歓びの一つとなる。

詩篇41･1～原典及び独訳では41･2～4〕。

（１）「弱者を顧みる人は幸いなり。神、彼を禍の日に助け給う」（詩41･1私訳）

# ●８月８日

小さい歓び楽しみごとが、存在をたのもしいものにするのであって、あの小さな愛らしいアルプスの高山植物のように、幾分硬い岩石の転がっている土壌にのみ繁り栄えるのである。しかも今日まことに多くの人々が、自分の存在を破壊している。それというのは彼らが単に経済上のみならず、特にまたたましいの上で到底堪えられないほどの贅沢に身を溺らすからである。

箴言30･8、15･15、12･11。

# ●８月９日

人間の生活において最も注目に値することは、享楽欲がつねに苦悩を結果し、克己が、それによって行動する以前にすでに、最高にして最善のをいつも伴うということを、ひとはすでにに経験から充分よく知っているということである。

雄健な決心、あるいはさらに善いことは、直接の善い行動は最善の薬である。特に、神経衰弱とか一般に神経病と呼ばれており、そしておおかたは肉体的ならびに精神的欠陥の混合であるような状態においてそうである。

# ●８月１４日

人生の最難の瞬間は、人間がその自己愛から根本的に離別し、従って神秘家が「滅却」（放下）と呼んでいるところの本格的な死のに入ってゆかねばならぬ時である。そのあとに続いてくる或ることの約束の、明確な、つねにきらめく微光がなければ、誰れもこの死に耐えないであろう。また誰れもおよそ戦慄なくしてこの死に直面することはないであろう。我らにとって幸いなことは、我らはおおかた、やむを得ない事情によって、ただもうせざるを得ないという立場に置かれるのである。でなければ実践への力が欠けるであろう。ところでこの力は、ただ自分をゆだねてしまうことでありさえすればよいので、選択というようなものではない。

しかしこの事態を自ら体験したことのない者は、これを実行しようとするあらゆる人に向って言う、「パウロよ、おまえは気が狂っている」と。

行伝26･24。同胞教団讃美歌732。

# ●８月２１日

正しくいとなまれたどの人生にも、いつかこういう日が見舞う。すなわちその日には、「この世の君」〔サタン〕が検閲にやってくるが、少なくとも意志の上では、もはや彼に隷属する何ものも彼が見出だすことを拒まれるわけなのである。しかしそのとき「最後の力戦苦闘」が始まる。この一戦でなお堅忍することが肝腎である。ヨハネ14･30、12･31。エペソ2･2。

　シオンは公をもってあがなわれ、　　その立ち帰るは義をもってあがなわれる。　　　　　　　　　　　　　　　　　（イザヤ1･27）

その意志をあなたの中に住まわせるに充ちた全能の神でさえ、あなたの心を新たにし得ない、あなたの心が逆らううちは。 ただ義をもってシオンを贖うのが神の永遠のはからいである。あらゆる悪からおのれ自らを

かしめた人こそ自由である。

華美と栄誉とのない生活を、

虚しくんだものとあなたは思うか。然らばこの荘厳なの重きをあなたは担い得ない。

（１）〔訳者註〕このイザヤ1･27は私訳であるが、ヒルティーのドイツ訳原文は、「シオンはをもってあがなわれ、そのはをもってあがなわれねばならない」である。「公平」または「公義」の原語「ミシュパート」は審判を意味する語で、この場合「公正な審判」の意である。現行訳「悔い改める者」は原語は「立ち帰る者」で、「悔改」ということは、行為的に立ち帰ること、心の方向転換をなすことが原義である。現行訳「正義」という訳は語意が狭くなる傾きがある。「セダーカー」という原語は、むしろ端的に「義」と訳した力がよい。神と人との関係が正しく立つこと、神意が行われる事態を「義」という。そしてこのイザヤにおいては、それが救贖的な角度で意味されているので、恩恵的な義であるから、「恩義」と訳してもよい。イザヤにおいては「義」はしばしば「恵」と同義に用いられている。

　　　　それで全節の意味は、シオンをもって代表されるイスラエルの民の中、神に立ち帰った者、すなわち悔改、回心者たち（信仰をとりもどした者たち）は、恵み深い神の救贖の義をもって贖われる、というのである

　　　　なおドイツ訳の「捕囚人」は「立ち帰る者」がバビロニア「捕囚」からの「帰還者」との関連において言われた者と解するならば、「捕囚人」という訳も成りたち得る。

# ●８月２５日

我らは宗教的真理をどれもすべて即時に把握するというわけにはゆかない。それとは反対に、宗教的真理は、それに対する我らの感受性の生長する度合につれて、次第次第に我らに贈られるものである。おおかたは、体験や人や書籍によって、時にはまたいっそう直接の方法によってなされる。キリストですら、ある困難な場合には、「これを受け容れ得る者は、受け容れよ」〔例之、マタイ19･12〕と付言しておられる。しかもその最後の説教において、彼はなおいくつかのことを語らずに胸におさめてしまったことを明かに告げ知らせているのである。ヨハネ16･12～13。このを補いかつ継続するために、我らが「聖なる」と呼ぶところの霊がまさに存在しているのである。しかし、あなたがこの霊をあなた自身の霊ととりちがえたり、あるいは混同するだけでもせぬように気をつけよ。あるものがあなたのうちに臨み来って、そのものが、あらゆる気分とか傾向とか学識とかによって、およそあなた自身の全存在によっても、妨げられることなく純粋に、つねにあなたのうちで真理を語るのでなければならない。しかしそれはキリストが語ったところのことにつねに土台を置いているのでなければならない。これから離れるものは、偽りの霊の言でありである。

人間がこの世における自己の天職に迷い、意気阻喪し、あるいは後退せんとするような時期が人生には往々にして襲い来たるものであるが、かかる時期にあたって最も確実な慰励となるところのものは、もともと我らが神を選んだのではなく、神が我らを選び、おのがとなし給うているのだというである。ヨハネ15･16。エレミヤ10･23。

この思想をもって「屈辱の谷」を通り抜けねばならない。然らば、ついにこれらの苦難の目的が達せられるや否や、事態は全く自然に善くなってゆく。

# ●８月３１日

憂悶の深く食い入る鋭いが、我らの心に絶えず後から生えてくる外皮をつねに新たに剥ぎ取らねばならない。かくて後、はじめて永遠の真理のり豊かなるべき新しい種子が、我らの心に落ちてそこに根をおろし得るのである。こういう経過を踏むことなくしては、我らは真に人生の根底に横たわっている本当に真実なる事がらに対して無感覚のままに終るであろう。

ひとは幾多の生活経験を積めば、ついにもはや全く苦難のない生活を願わぬという境地に到るものである。これこそが「永遠の平安の状態」というもので、ここ地上においては、苦難は我らの悪い性情から我らを保護する守護者であり、我らを不断にってくれる番人であらねばならない。然り、然かのみならず、苦難は、そうでなければ即ち我らなお耐え難かるべき生活の単調を活気づけてくれるのでなければならない。

　　曠野より出づ

　　　　　　（申命2･7）

こころゆくまで我ら憎めり、今こそ終に我ら愛せん！

がためになおも残れる

の荷を投げ棄てよ、わが心。

とりどりの此の世の宝の

にはや飽き果てぬ。主よ、汝が意志とこそ、これより我らが歓喜なれ。

ののうちにととを求めたりしが、

見出でたる小さき貴きこの真珠、

いざわれはりて離さじ。

こころゆくまで我ら憎めり、今ぞに我ら愛する！れのくも決意せしことの

実践に、今こそ移れ！

# ●９月１日

人間は次の二つの事によって、あらゆる善から最も力強く妨げられてしまう。その事は誰しもその生涯で一度や二度はかに経験したことであろう。すなわち、或る人が何か悪いことをまさにしようとするとき、その人は自分に言い聞かせて、これはちっとも悪いことではない、世間一般の慣わしである、こんなことをしたとて結局は善人たるにかわりはないだろう、と。ところがそのことをやってしまうと、彼には突然、今さら立ち帰って赦しを見出だすもないと思われてくる。この悔改を思いとどまることは特につねにうち退けられねばならない。神はどんなをも必ず受け入れ給う。その悔悟がどんなに時機遅れのものであろうとも、またその悔悟がどんなに重ねた累犯の揚句であろうとも。まことに我らの主は力や平安を求めて彼に依りる誰をもしりぞけない。私はもう一度力をこめて言っておく、どんな人をもまことに例外なくどんな人をも。

イザヤ1･18、43･25、44･22、45･23、55･1～3。詩篇51。ヨハネ6･37。マタイ11･28～30。

かかる人は後になって反対に、最も信頼できる人であることがしばしばである。なぜなら、彼らは一方において享楽生活の惨めさを、他方において〔魂の〕平安がどんなに幸いであるかを、深い経験から学び知り、どちらをるべきかを識っているからである。

「わがために我れなやみ尽くしぬ、

わがために我れき足らいたり。おのが建物、そは砕け散りぼい、これが跡より家新たにぞ建つ。

を期してぞ建てられし家、

のにれはせじ。天つはそこに燃え立ち、の煙ぞ日ごとに昇る。

み怒り去りぬ──戸は開かれてあり──あわれなる、今こそ自由！行手にはなき希望と

しき時劫の横たわるあり！」

　　　　　　　　　　　（出エジプト34･10）

# ●９月１１日

いわゆる人間愛はすべて、神に対する強い愛の根底がなければ、一個の幻想であり、一片の自己欺瞞である。なんとなれば、この場合ひとは、単にいとも愛嬌ある者たちを愛するか、または自分を愛してくれる者を愛するかにすぎず、いつにてもこれらの条件が脱落すると思われるや否や、つねに著しく急速に決意して、愛を減ずるか、さらには愛を全く棄ててしまおうとするからである。でなければ、人間愛とは一般に、かなり冷淡な一般的な好意に対するやや美名といったもので、実際はむしろ、飽食した猛獣でさえその周囲に対してもつような無実な態度である。

このような人間愛では、年ごとに幾百万の人間が精神的にあるいは肉体的に餓死しようとも、そのためにこの愛はいたく心をなやますこともなく、あるいはきわめての耐乏をも自分で担うことがない。

# ●９月１６日

最も確実な、いつも現在する信仰は歴史的信仰である。神が我らの心情に近いので神を明らかに感じたり、あるいは個人的な経験が我らをあらゆる疑惑から解き放ってくれたりする時が確かにあるにはある。がしかし、他の時には世界歴史に、しかもその中で特にイスラエル民族の運命に我らの心の平安を求めねばならない。イスラエル民族は今日もなお一民族として神に棄てられないでいるのではないか。然るにかのギリシア人とローマ人ははるか昔に消えて跡もない。

またキリストを信ずるにしても、それが歴史的であるときにのみ、真に堅実であることが出来る。ロゴス理念の如き形而上学的内実は、すでに〔キリスト信仰の〕確信のない者にとっては、その論証力は非常に薄弱なものである。

神の正義や慈愛に絶望的になり始めると、たちまち神の存在をも疑うに至るであろう。なんとなれば、義でもなければ、善意もない神は、高尚な人間には耐え難いまたわしいと思われる一個の偶像であるからである。

# ●９月２５日

キリスト教真理の善き証明にして、キリスト教こそあらゆる崇高な天性の人間の、真理と心情の完全なる平安への渇望を充たし鎮めることの出来るものであるという経験的証明に優るものはない。このことを果たす者こそ、悩める人類の真の権能ある救贖者である。

キリスト教は、一般に決して非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、およそ存在する理想主義のうち、ただこれのみが実践され得る、また最も有効なものである。これがキリスト教のこの世界における永続的な意義である。

# ●９月３０日

一週の満載の仕事の重荷をおろしたあとの日曜日が一番快適であるように、苦難のあとの幸福が最も爽快な、最も無難なものである。

根本的に自己愛から解放されて後、これがなおしばしば立ち現われんとするや、むしろこの自己愛をある悪魔のように憎むに至るならば、そのとき神の恩恵は確実である。なんとなれば、このことたるや、神の内在的なであって、神が現に生きてここに在ますことなくしては決して起こり得ないからである。

　　高き山地を去りてゆく

いざさらば、れ緑なす山地よ。

くれないに花咲き匂うよ。

快き自由の夢は消え失せて、秋風のうままに別れゆかなん。

はかなくも飛ぶが如くに夏は去り、

牛をうははや谷間にりぬ、

山々の嶺きはみなやがてまた

のをまとわん、のこるなく。

みどりき森よ林よ、いざさらば。

この聖き地のは成りぬ。汝らの泉に飲みし我れは、

新たなるいのちに溢る。

わが心、むなしきを断ち切りて

健やかなり。わが意志も自由を得たり。

わが前に約束の地ぞ横たわる、

誰か知るその静けさに神ますとは。

この山をりゆく我は別の人。

黄金のを今あとにして、

別れゆく心すすまず──さはあれど、

げに我は求めしことを見出でたるなり。

# ●１０月５日

誰れであろうと神におのが意志を全く捧げたならば、しかもこの意志は彼が神に供し得る唯一つの贈物であり、また神はこれにのみ価値を置き給うのであるが（その外のすべてのものはまことに神の賜である）、そのとき、これは大胆に聞こえるけれども、神はその人に神の意志を与えて彼のものとなし給う。かくて神はその後彼に対し、あらゆる彼の願い（それをもしかし神は自ら導き給うのだが）を聴き入れ給う。今や彼はただ願いかつ受けさえすればよい。しかも神は自ら彼を促して願わしめるに詩篇第81の次の言をもってし給う、「あなたの口をひろくあけよ、わたしはそれを満たそう」〔詩篇81･10（原典は11節）〕。

けだし神は、およそ我らが神について知るかぎり、かぎりなく愛に満ちた存在であり、神の心をこめて願い給うところは、人間にとって彼が大いに頼みある者であること、然り一切であることであり、またすでにこの地上において、人間の弱い性質をうことなくして、およそ能うかぎり多くを彼に贈り得んことである。しかし、遺憾ながら、人性弱くして一度には比較的僅かの幸福にしか耐え得ないのである。

# ●１０月６日

キリスト教はいつまでもそれ自体完全に健全なものであって、絶えずあるいは治癒を求め、あるいは増長してこれに押し迫ってくる不健康な分子や病的な分子をすべて征服し得るのでなければならない。

このことがすなわち、何故にキリストがあのように度々彼の弟子どもから身を引き離して、ひとり寂しく山に登ってそこに新しい〔祈りにおいて神と深く交ることにより〕強化を求めねばならなかったかの理由であったのであろう。

してみれば、特に精神的な不健康者の群が間断なく蝟集してくる形式的な「祈祷治療院」は、それだけに背反したものである。そんなことには誰れも害を蒙ることなしには長きに耐え得ない。

# ●１０月８日

神の秩序に従えば、統治を合法化することは、統治者がもはやおのれ自身のことを顧みず、ただ万人の僕たことに在る。その他のいかなる合法性も誤謬である。すべての主権者はこれによって判断さるべきである。

（１）〔訳者註〕「私は国家の第一の僕である」と言い、民意上達をこれ努めたプロイセンのフリードリヒ（1712～1786）はかえってやはり民から「大王」として尊ばれ、「フリッツ」“Vater Friz”と呼んで親しまれた。天地万有の創造主、人類の歴史の主宰者たる絶対主権の神が、人類救済のためにその独子をついにベツレヘムののに出現せしめたということ、貧しさとみばえなさのどん底のにおいてイエスを遣わしたということほど逆説の極みの事実があろうか！　神の子イエスは「人類の僕」として自らを自覚しかつ献供した。これがまさに「人類の王」にふさわしい無的実存であった。

　　　　ルッターの名著『キリスト者の自由』の冒頭の有名な命題、「キリスト者は、万物の上に自由なる主であって、誰れにも仕えない。キリスト者は、万物に奉仕する僕であって、誰れにも仕える」。この一見相反する二命題に実は民主主義の根本精神が道破されている。「キリスト者」を人間と置き換ればよい。人格の自主自由は、それが自由なる愛の奉仕としてはたらくときに最も健全であり、礼会も世界も本質的な平和へと進展するからである。印度のガンジーはその体現者の最も著しい一人であった。シュヴァイツァー博士もまたそうである。

# ●１０月９日

キリスト教を簡潔な表現においてもちかつ把握しようと欲うならば、全キリスト教は実際ヨハネによる福音書第３章に含まれている。しかも現今なおこれについて、ほとんど二千年の昔と同様の誤謬が我々の間に、キリスト教界のただ中に、存在している。

今日もなお、いかなる正式の教義も、いかなる学問も、またいかなる事業も、総じてこれらが生れつきの性質を変革しないかぎり、我らを充分助けて真の生活に到達せしめない。言い換えれば、キリスト教の意欲するところが人間に自然となり、従って該教が親しみ易く自明なものにならねばならない、あらゆる自然なものがまさにそうであるように。かくて人はキリスト教についてもはや思案したり、あるいは自ら何か企ててみたりする必要がなくなり、むしろ反対にキリスト教に背反するものは自然の反感をき起こさせ、これが克服の必要ありということになるであろう。事態がこのようであるならば、ヨハネが明らかに自己の経験からその第一書翰で主張していること、すなわち神の命令は毫も困難なものではないというつねには信じ難いことさえ、実現するのである。なんとなれば一たん自然となったものはすべて、たしかに困難ではないからである。

このことを熟慮せよ。あなたもそこまで到達しなければならない。また到達するであろう。これがこの人生の目的である。それまでは、私と共に、君自身をキリスト教の友であり生徒であると心静かに思うがよい。かくてともかく、我らは全く善い仲間になるのである。というのは、私は私の生涯で完全に自然になりきったようなキリスト者に未だ多く出会っていないから。ところでこういうキリスト者は、（この際、充分真相を重んじて言うなら）新旧両教徒間にかなり均等に分かたれており、しかも男性の間におけるよりも女性の間に多いのである。

# ●１０月１６日

信実（Treue）は、まことに、最も美しく最も大切な性質である。信実は動物をも非常に貴きものとなし、彼らをほとんど人間的価値と品位にまで高めるほどである。けれども信実の全く欠如しているところでは、最も才智あり教養ある人間も、社会一般に危害を及ぼす野獣にすぎない。

# ●１０月３１日

ルカ11･。我らの内心に起こる最も善い、最も決安的なもの、概していつも電光的性質をもっている。すなわちそれは別の世界からの恩恵の一閃であり、光明の一輝である。おおかたそれは単に一つの洞見であるばかりでなく、同時にまた積極的行動を起こす刺激である。そこで、この決意を同様に速やかに把み、そしてそれを直ちに遂行するのは人間にゆだねられた仕事である。然らずんば折角の恩恵の眼差しは過ぎ去ってしまう。しかし我らがこの決意を掴んだならば、この決意はの翼ある鷲であって、普通は越え能わぬ障碍をも越えて、我らを逞しく高揚させる。神の国〔天国〕への道はまさに全く独特のものであって、学修の普通の規矩ではなかなか測り難いなのである。けれどもこれを経験したことのない人は、これを信じようともしないのである。

　　落葉

　　一

深みゆく秋、山またをさすらえば、の木の葉の落ちゆく。

鳥の歌絶えて聞こえず、こののいずこにも。

霜と雪とはやがて包まん綾をなすのを。いかなればなくこの汝れは曰う、「秋の暮、などかくは遅く来たりし」と。

のわが身に我れは敵となりぬ。わが身は既に明け渡たされたり。

今や来ぬ、真剣の友なる死、死ののちには来たる。

　　二

が意志はわが意志となり、不安は平安に。

はを得。

かれしはに結ばれ、失せたるは見出されたり。

のに我れ生かされぬ。

（１）「もし汝の全身明るくして暗き所なくば、輝ける灯火に照らさるる如く、その身全く明るからん」

〔訳者註〕全身明るからんためには、聖霊の光が衷にともっていなければならない。

（２）〔訳者註〕この日に因んで一言註したい。すなわち１５１７年のこの日には、宗教改革の狼火が、ルッター自ら期せずして挙げられた。すなわちかの「九十五提題」をヴィッテンベルクの城教会の扉に揚げたのが、はからずも改革への決定的な第一歩となった。真理に迫られ、聖霊に動かされて、ルッターの内心に閃いた霊光が、行動に移された消息は、ここに著者の言うものとまさに符合するものがあったはずである。ただルッターが「九十五提題」を草案し、ねりにねったことは、学的良心による地味な仕事であったが。

　　　　その貼紙の見出しにルッターはこう書いた、「真理に対する愛と真理を明らかにしようとする意志により、以下の諸条目がヴィッテンベルクで論議されんことを願う。……」

　　　　その第一条に曰く、「我らの主にして師なるイエス・キリストが《汝ら悔改めをなせ……》と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを意味し給う」。これは実にキリスト者の大憲章とも言うべき言である。紀元第一世紀に、洗礼のヨハネを先駆として、イエスによって放たれた「悔改」「回心」「転心」の宣言が、第十六世紀の初め、再びルッターによってとりあげられ、「悔改」（心をらすこと）の真義が宣揚された。そして今や、二十世紀の中葉、世界史の最大の危機を孕みつつあるとき、三たび絶叫されねばならぬのは、この一言よりほかにない。

（３）〔訳者註〕「最早自己を見まじ、その健康に拝脆すまじと決意した。と同時に私は忽然として元気付いた。元気づくと同時に、他者の他力は私の上にも、儼として如実なる力であった事を知った。一切が彼の誘導によるものの如くに見えた。」（三谷隆正）

# ●１１月３日

ひとは決して聖につき、あるいは徳につき、あるいは義について余り多くを語るべきではない。義は、聖書が言うように、透徹した慧眼の前には、なおつねに「汚れたにすぎないからである。

人が地上において達成することの出来ること、また他人にすることは、神への愛であり、従ってまたあらゆる真と善とに対する愛であり、すべての同胞に対するまことの善意親切である。このことを絶えずおのが身に感ずる人は、最高万能の人生目的を達したというものである。

（１）〔訳者註〕イザヤ64･6にある言。現行口語訳では「われわれの正しい行い」と訳してある。旧訳文語では「われらの義」。

# ●１１月１０日

善への刺激も、悪への刺激もおおかたは電光石花的である。前者に対しては直ちにこれに応じて、我らを助けようと差し伸べた手を、実行によって掴まねばならぬ。後者に対してもまさに同様に、直ちに、意志の断固たる抵抗をさし向けねばならない。「かくして人は星にまで登りゆく。」（Sic itur ad astr

（１）〔訳者註〕ヴァージル『エネア』第９巻641行の言。

# ●１１月１５日

真の知恵がどこから来るかを、他に知りようがないときでさえ、ヨハネ5･19､の聖句はこれについて我らにさないでは措かない。キリストですらこの法則の下にあったのに、どうして我々は、知恵を我ら自身から見出だしたり、あるいは世智の学校で学んだりする僣越を敢えてし、我々に対しても開示され、しかも我々がキリストの言行に明らかな実証を見るところの同じ源泉をね出そうとしないのであろうか。

ヨハネ7･15～18、6･63､68。マタイ7･29。

（１）「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をもなし得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり」（ヨハネ5･19）。

　　　「我自ら何事をもなし得ず、ただ聴くままに審くなり。わが審判は正し、それはわが意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る」」（ヨハネ5･30）。

〔訳者註〕このようなキリストの在り方を私は無的実存という。それで、キリストを無的実存者、略して無者といっている。

# ●１１月１７日

私は、私の生涯において、人間軽蔑者になればなり得たが幾度もあった。私がそうはならなかったのは、人間社会の上層階級との相識に由るのでは決してなく、反対に小市民階級の生活や考え方への洞察に負うのであった。

ひとは世の小さき者に対する眼と愛好をもつに至るや、現代のたる厭世感から永久に救われる。これに反して、誰でもなおたとい単に秘かであっても、高きもの、貴きもの、あるいは外観の立派なものを好む傾向を内心にもつ間は、そしてこれは今日まことに教養あるまた半ば教養ある階級においてほとんど例外を見ない現象であるが、そうであるかぎり「この世のがなおその権限を失っておらず、従って確実な幸福はのぞめない。付言したいのは、小さいものは普通、とにかくそれを相手どってみようと思えばはるかに興味あり、愛すべきものであるということである。巣でみられる一匹の蟻、あるいは勤勉な蜜蜂一つ、あるいは一羽のどりは、獅子とか鷲とか、いわんや鯨といったものよりもはるかに観る甲斐のある心の惹かれる動物である。それからまた小さなアルプスの小花はどの一つを見ても、きわめて派手なチューリップやあらゆるモダーンな簇葉植物よりもはるかに美しい。人間においてもまたその通りである。この世の小さいもに目をそそげ。それは人生をもっと豊かにし、もっと心足ろうものにする。

（１）〔訳者註〕サタンのこと。ヨハネ12･31、14･30、16･11

（２）〔訳名註〕マタイ18･1～14に「小さいもの」に対するイエスの深い言がある。

# ●１１月２８日

仕事に際しては、いつもまず第一に最も必須なことをせよ、しかも活発に、かつ主眼を捉えて着手せよ。これが多くのことに時間の余裕を得るのである。第二の、これとほとんど同様に善き方途は、不必要な仕事や努力を避けることである。

さて次には、生涯において然るべき時期に、娯楽とか社交の義務とかいわれているきわめて不必要なことをすることが出来るならば、過度に努力しなくとも、そして健康をよく保ちながら、普通の仕事の量の二倍も三倍も担うことが出来る。

# ●１２月１日

いつか、老年期の始まる頃のある日、ひとは過去と結末をつけねばならぬ。怒りの心もなく、悔いのいもなく。過去の本を閉じてもはやそれを開いてはならない。その中にあるすべての善きものに感謝し、すべてが善き結末に来たことを特に感謝しなければならない。そして最後には、すこぶる多くのことがもはや起る必要がなく、永遠に片付いたことを感謝せよ。

こうなったら、全く別なものである「永遠の」生活に向って突き進むがいい。その生涯への立ち入りの諸条件は、ヨハネ17･3及び6･4にある。前途の見通しは今後無際限なものである。

「のぼりゆく巡礼の旅路で

教えをさらに大きく深く学びつつ、

なおも我らは恵まれたをはげんで

決して疲れず、断じて休むまい。またつねに新たな力をもって聖なる者、真なる者につかえよう。」

 （デイーン・スタンレー）

これになお付言さるべきは、これは単に「罪の赦し」であるのみならず、なおそれ以上のこと、すなわち罪の自己忘却であるということである。

「赦す」（Vergeben）と「蔽う」（Bedecken）との間の区別をローマ4･7も詩篇32･1も立てていると思われる。これは時間的にも互いに遠く隔たり得る二つの異なった段階である。けれども人間自身における悪のあらゆる追憶の消滅をもってのみ、神の赦免は完成される。なぜならばまさにこの痛ましい追憶が未だなお防がねばならない後転のいが追憶消滅の暁にはもはやないからである。

のにおいては、およそ生涯におけるあらゆる罪過の追憶、また同時にあらゆるわしいこと重苦しいことの追憶が沈み去って、神のかぎりない恩恵の祝福された感情のみが残るといわれているが、あのレーテはダンテにおいてなる天国界にあるのではなく、なおなる浄罪の山を流れているのである。けれども、あらかじめおのが過誤をすべて正直に認め、真実に悔いた者のみが、すでにこの地上において過ぎた時のあらゆる痛ましい想い出から完全に解き放たれる。

ダンテ『神曲』煉獄28･127～128、29･3､71、30･142～145、31･40～42､94～103。

の川

「赦し」とはに充てる言葉なり。

さわれはいやはての言葉に非ず。我ら願わじ、われらの罪を

の座にて想い出ずるを。

我ら願わじ、おのが心のにかの追憶のあらんとは。いとも明るきのもと

新たなる今や栄えよ。

我ら願わじ、の我らに

なせしところを憶え居らんとは。

「赦し」につきて語るあぎとは、

さなくば、またもに嘆く。

われら願わじ、天つに地のの到らんことを。われらは願う、いやはてのもせたる光の川を。

# ●１２月３日

もしあなたがいつか本気になって聖書を読もうと企てるならば、そしてそれはキリスト教を識りかつ尊重することを学ぶのに、どんなときでもこよなく善きであり、いつまでもそうであろうが、その時はまずあなたの弱さ、特にその事に気の向かない「旧きアダム」と話し合いをつけて置くのが賢明であろう。そして全く興味索然として来たら、皆目見当がつかなくなって来たら、直ちにもうそれ以上は読まないがよい。

聖書の各篇をすべて識るのは、疑いもなく善いことである。けれどもその中のいくつかは（それでも我らはそれなしで済まそうとは決して思わないが）この段階の初学者には、無意味なあるいはとっつきの悪い印象を与えることは否み難いところである。まず福音書から始めるがよい。これは最も大切なものであって、こちらが誠実であれば誰も感銘を受けないことはない。次には歴史的な諸篇を読むがよい。古代のいかなる他の歴史書も到底これにはかなわない。次に詩篇とヨブ記。次に預言者の諸書、そして最後に使徒たちの書翰、使徒行伝と黙示録、ここから我らの歴史がすなわち始まっているのであるから。あなたは箴言、伝道の書、及び雅歌を、古い詩歌や金言の興趣ある作品とみなすことが出来よう。これらの諸書は、仏陀から由来したとしても、または〔婆羅門教の原典〕に載っていたとしても、きわめて高き称讃を博するであろう。

その他、聖書のどの篇を特に愛好するかは全く個人的なことがらである。詩篇第37及び第73両篇は、「不信の徒輩が幸福を享楽していること」のために、こちらが内的な試誘に陥ったとき、最もよく心を鎮め宥めてくれる歌である。詩篇第90はおそらく最古の有名な祈りであって、今日もなお昔時の如く清新にして美しい。詩篇第91は古来すべての戦士、勇士の愛吟である。ヨハネによる福音書はキリスト教の内的性質を最も善く開示するものである。マルコによる福音書はおそらく直接の証者の生ま生ましい追憶に相応する事実の最も根源的な物語であったが、非常に簡潔なもので、そしてその結末に関しては、私の知れるかぎりでは、批判の論駁を免れ得なかった。けれども読者にして全く誠実であるならば、どっちみち決して充分信憑するに足らぬ歴史的批判よりも、読者自身において証明され得る内的真理の方が、これらの諸書において重要である。

いずれにせよ、豊富な内容と激励の力とにおいて聖書に匹敵し得る書物は現に存在せず、未だかつて存在したこともない。

# ●１２月５日

「その友らに彼は眠れるに善きものを与え給う。」これは次のようなことを意味せんとしている。すなわち、彼らはって仕事をしたり、ったり、あるいはさらによくない方途に訴えて立身出世するには及ばないのであって、そんなことをせずとも、仕事も、生活の資も、幸福な結婚も、友人も、気力も、健康も、必要ならば休養までも、およそ人生の大切な宝はすべて与えられるということを。さりながら彼らは神の命令に即座に、忠実に聴き従い（「両脚で跛行する」ことなく〔すなわち、二者択一に迷うことなく〕）、働き、神の賜を全く誠実に使用し、これをもっておのが隣人を助けようとしなければならない。

神及びキリストと共なる生活は、世にあるかぎりの最も容易な生活である。それはされた一種の気楽さすらも生み出だすものである。それは人間の生存を、この世のあらゆる享楽より愉しいものに成し得るし、しかもごく僅かの資力があれば足りる、あるいはむしろ全くなんらの資力をも要しない。というのは、それにはただ神との堅い友情のみが必要であるからだ、もしこの場合「ただ」という小さな語を用うることをゆるされるならば。これは不幸な人たちの本当の助けで、もし彼らがこの助けを知りかつ欲するならは、決して彼らに欠けることのあり得ないものである。

マタイ11･、14･30､31、19･29。ヨハネ15･7、16･24､33。第一ヨハネ5･3。マラキ3･14～18､20。

（１）「わがは易く、わが荷は軽し。」